

FACULTY OF LETTERS

# 文学部生のリアルな！ 大学生活

Vol. 52

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。



文学部人文社会科学科社会学専攻4年  
私立麗澤瑞浪高等学校(岐阜県)出身

たかもり こう  
高森 光

## 社会はこの手から

く興味を惹かれ、社会学を専攻するに至った。きっかけは、小学生の体験にさかのぼる。

### 瑞浪市という街

私は瑞浪市という街で生まれ育ち、自然が豊かで雰囲気穏やかなこと、大都市にも近く生活しやすいことに愛着を持っていた。ある時街中ではかの市から来たと思われる家族連れにこう声を掛けられた。

「この近くでどこか遊べる場所はありませんか？」

不意に聞かれて戸惑ってしまった。愛着を持っていたにも関わらず何も答えられなかったからである。

ふと考えると周囲の施設どころか地元をあまり知らないことに気付かされた。その後、街の名産品を調べたり地域集會に顔を出したりするなど市内のことを調べはじめた。

いつもとは違う視点で街を見渡すと地域が大きく変化していることに気付かされた。全国平均を上回った高齢化率と一昔前より減少した人口、名産品であった陶磁器は海外からの

影響を受けて衰退しつつあり、数多くあった企業も数えるほどしか無いことを目の当たりにした。テレビのニュースに目を向けると全国で同じような地域が増加していることを知り、現在起きていることが「社会問題」であると初めて認識した。どうにかしたいという漠然とした問題意識と、自分にもできることがあるはずだという期待を持ちながら生活するようになっていき、次第に地域を取り巻く社会とは何なのか興味を持つようになっていった。

### 大学に入学してから

大学に入学してからは社会学理論の勉強と調査実習に励んだ。社会学では社会現象の規則性を捉えて分析をすることが求められる。社会学専攻は1年次から社会学理論と調査法の指導が行われており、聞き取り調査や統計資料を通じて社会現象の分析を行う機会が設けられている。

特にフィールドワークでは、みずから問題を設定しながら調査を行うっていくことから個人の興味関心に



大学院授業に参加した様子

沿った研究を行うことができる。私は「地域を活性化させる要因は何か」という問いから実際に街づくりを行っている行政や団体の方にインタビューを行い、社会問題に対する解決策や意識していることについて伺った。当事者に話しを聞いてみると、当初の予想とはまったく異なった要因が絡んでいることも多く、問題の構造を分析することの重要性を学びながら進めていくことができた。

### 弁論部への入部

加えて大きな転機となったのは弁論部への入部である。私の所属する辞達学会は、さまざまな社会問題を取り上げながらその解決策とみずからの問題意識を訴える弁論というものを行っているサークルである。年に10回近く行われる大会に出場し演

### 社会学とは

社会学とは、社会の構造を明らかにすることで社会現象を理解可能にする学問である。「社会」と聞いて内容を想像できる人は少ないかもしれない。さらに多くの人にとっても「社会を変える」ことは、無理難題に聞こえるだろう。目に見えないにも関わらず変化しながら私たちの周りに存在している不思議なさまに強



弁論部で外部大会に出場した時の様子

説を行っており、私自身も大会に2度出場させていただくなど大勢の聴衆がいる前で社会問題の解決性を訴える機会を頂いた。

弁論部での活動は非常に刺激的でこれまでの人生において代えがたい体験であった。みずから持つ問題意識を相手に伝わるよう言語化するだけでなく、客観的な妥当性や他の問題と比較しながら重要性を主張することが求められるため、社会問題がなぜ問題になりうるのかと考えさせられる経験をした。発表するにあたって文献にあたりながら現状を確かめたり、現地に赴いて話を伺ったりするなど、自分が主張する意義を考えながら取り組むことができたと言える。自分が作成を指導する側に回ってからは、後輩が



インターン先で文字書き体験をさせていただいた徳利

どのようなことを訴えたいのか、どう工夫したら主張が伝わるかなどを考えながら生活を送るようになった。特にさまざまな知見を持つ仲間と議論を通じて価値観を作っていた経験は、その後の進路を決定するうえで大きな糧になったと感じている。

**新たな試み**

さまざまな社会問題の解決策に触れたことで、自分も解決する側に回りたいと考えるようになった。そこで昨年の夏に参加させていただいたのが、地元での就業インターンである。現在の瑞浪市では地場産業に留まらず、シティープロモーションや新たな取り組みを通じて街全体を活性化させる動きが盛んになっている。私がお世話になったところでは、タイルの製造販売に加えて、市内の古民家をリノベーションして有効活用したり、陶磁器に付加価値を付けて

## 文学部だより

# 中国語圏の本と話題がいっぱい!!

おせきめくむ  
**尾関 芽** 中国言語文化専攻共同研究室員

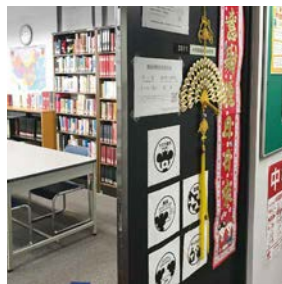
多摩キャンパス3号館には14もの共同研究室があるのをご存知でしょうか。名称が「文学部専攻共同研究室」となっているため、所属学生の専用と誤解されがちですが、いずれも中央大学の皆さまに開かれた「専門図書室」です。

一例として私の所属する中国言語文化専攻共同研究室(以下、中言研究室)をご紹介します。中言研究室は中国・台湾・香港など、いわゆる「中国語圏」の言葉や文化に関する2.1万冊を超える本・雑誌、1,200点以上の視聴覚資料を所蔵しています。中国語圏の言語、文学、文化、思想の研究者である教員が選んだ資料は、専門書・学術書のほか、学修の理解を助ける新書や一般書、中国語で書かれた絵本や漫画、教科書、現地でよく読まれている小説や全集が原書・翻訳書ともにそろっています。調べものに必要な辞書・事典・年鑑・地図などの参考資料も多数備えており、広い机で複数の資料を並べながら利用することができます。中国語検定やHSKといった語学試験の問題集もあります。視聴覚資料はこれまで日本で公開された中国語圏映画をかなり網羅しており、ドラマやドキュメンタリーなどのテレビ番組もあります。

これらはどなたでもお越しいただければ見ることができます。

中言研究室のもう一つの特徴は「ふらっと来ておしゃべりができる場所」です。中国語学習に関する質問、留学や大学院への進学相談、ガチ中華や映画・演劇、旅行の感想、さまざまなことを聞きたい、話したい、皆さんやって来ます。常駐スタッフの室員がお話を伺うこともあれば、その場に居合わせた人たち(学生や院生、留学生、教員など)がおしゃべりに加わり、さらに話題が膨らむこともあります。

新しい季節、ご子女が中国語を学び始めたり、中国語圏のカルチャーに興味を持ち始めたりしてしましたら、どうぞ中言研究室の存在をお知らせください。豊富な資料とそこに集まる人々がいつでもお待ちしております。



中言研究室(3号館5階)は入口の飾りが目印です。

後世へ残そうとしたりするなど、会社の事業やこれまでの経験で得た技能を地域に活かす活動を幅広く行っていた。インターンを開催したほかの方々もみずからの得意分野や地域に対する愛着を地域に還元していく姿を見て、私は地域社会が良い方向へ変化していくことを確信した。

現在の私はお世辞にも社会を変え

たとは言えないだろう。しかし大学の活動を通じて、社会を変えるためにはみずから考えて行動し続けることが必要なかもしれないと感じた。そして自分の問題意識を行動に移したことは大きな一歩だったといえる。社会がこの手から作られるのかもしれないと思うとこれからの学びがより一層楽しみである。